

運命の赤い瞳 Special Edition V

しあわせ

未来へ続く軌跡

キセキ

CONTENTS

PROLOGUE.....	3
止まない想い.....	8
<small>インヘリット・オブ・フォーエズ</small> 受け継がれし力.....	87
AS MY RIVAL.....	115
EPILOGUE	185

登場人物紹介

東風谷早苗

守矢神社の風祝を務める 17 歳の少女。元の世界に帰ろうとするシンを送り出すことを誓い、彼とともに最後の試練に立ち向かう。主に星の光と神風の暴風を用いた弾幕を得意とする。

シン・アスカ

幻想郷とは異なる世界から転移して迷い込んだザフトの少年兵士。17 歳。元の世界に帰るため、幻想郷で現地改修された愛機『デスティニーガンダム MB』を駆って最後の戦いへ挑む。

レイ・ザ・バレル

早苗たちの前でコンダクター（指揮者）と名乗っていた金髪の少年。外見年齢 18 歳。シンよりも先に幻想郷に迷い込み、記憶を失っていたが、里の戦いの後で自分が何者であるかを思い出す。

博麗霊夢（マユ・アスカ）

幻想郷の博麗の巫女を務める 18 歳の少女。巫女の仕事のほかに妖怪退治を生業としておりその腕は早苗以上。突如シンの妹の名であるマユを名乗り、シンと早苗二人の行く手を阻む。

河城にとり

河童妖怪の少女。幼い外見だがかなりの年数を生きている。強化を果たした『デスティニーMB』のサブパイロットを務め、シンを助ける。

八雲紫

スキマ妖怪の女性。霊夢のある目的のためと自身の持つ目的ふたつを達成するためにシンとレイを幻想入りさせた。

守矢真路

ドクター・ヴィクターが生み出したシン・アスカのクローン。外見年齢は 10 歳前後だが実年齢は 1 歳未満。親身になって接してくれた早苗に好意を持っている。本来の呼び名は『SAA1 号体』だが、早苗が即興で考えて守矢真路と名付けた。

PROLOGUE

東風谷早苗は紅く染まる空の中を翔びながら悩んでいた。

人間の里における決戦から二週間が経過した。あれから里はシグサリーから受けた被害を埋めるべく日々復興作業に追われている。早苗は命蓮寺、神靈廟などのメンバーと力を合わせて復興を手伝っていた。

その今日の作業を済ませた後。早苗は一人夕暮れに染まる迷いの竹林の上空を飛翔しながら、永遠亭へ向かっていた。そこで先に向かっていたシンと会う約束をしているからだ。

今のシンはにとりが尚も手がけているデステイニーの修復作業の間に暇さえあれば永遠亭にいる自身のクローン、守矢真路の元へ向かっている。真路は乗機の墜落の際に骨折して治療を受けているのだ。インパルスとデステイニーがなく、幻想郷の空を飛べないシンは徒歩しか移動手段がない。そのため彼単身ではにとりの作業場と永遠亭は遠すぎた。だから早苗が送り迎えを引き受けているのだ。

確か、レイ・ザ・バレルと名乗る金髪の男……シンの親友であり、コンダクターを名乗っている少年も永遠亭にいるはずだ。彼はシンと同じ世界の人間で、シンの呼びかけで元の世界の記憶を取り戻した。

早苗はシンとともに、記憶を取り戻したレイからこれまで聞いた事情を思い出す。

レイはシンと同じように、コズミック・イラから、幻想郷に突如迷い込んだ少年だ。満身創痍のモビルスーツと共に墜落し、コックピットから這い出したところを偶然通りがかった青娥に拾われたようだ。

そして青娥は、自らの欲望のために、幻想郷で暴れていた武装組織、シグサリーの存在をつかんでおり、彼らの行動をよしとしなかった。青娥はレイに指示を送り、自分たち以外のモビルスーツを持つすべての敵を討てと命じたのだ。それがレイの独自の行動をしていた理由だった。青娥はあらゆる強大な力に恋い焦がれてきた邪仙だ。自らが『保有』するレイ以外が駆るモビルスーツを許せなかったらしい。

当然、モビルスーツを保有するシンと記憶をなくしたレイは戦いあう運命にあった。

しかし幸運にも二人は直接激突することなく、言葉を交わさなのまま、シグサリーを壊滅させるべく手を取り合った。

シグサリーは抵抗した。偶然キャンプ地の近くに近づいてしまった早苗を人質にして、秘密裏に、プラントから強奪していた、ハイネ専用ステイニーガンダムMBと、残るモビルスーツのすべてを投入して、人間の里を占領し、シンとレイをおびき出そうとした。偶然里の中に居合わせたレイの機転と、シンの奮闘、そして、幻想郷中から集まったみんなの協力により彼らを無力化することができた。

それらがなければ、今頃早苗は死んでいたかもっとおぞましい仕打ちを受けていたかもしれない

ない。

シグサリーは壊滅して真路しんじも助かり、レイも記憶を取り戻した。シンたちが争う要因は、これで全て解決した。

しかし早苗の気分は未だ暗く沈んでいた。

原因はもちろん、里の戦いの後で博麗霊夢が自分たちと分かれる際に言い放った言葉にある。

『私は、マユ。マユ・アスカ……お兄ちゃんにもう一度会うために生きてきた、たった一人の妹なんだからッ!!』

——まやかしじゃない。あの言葉の重みも、凄みも、涙も本物だった。

マユはシンの妹の名前だ。地底界でまだ『嫌われ者の妖怪』の運命に苦しんでいたさとりが、シンのトラウマを暴いた時に早苗はそれを知った。赤みがかった茶髪と柔らかい表情が可愛い女の子だ。

しかし彼女は、もうどこにもいない。

マユはシンの生まれ故郷である、オーブのオノゴロ島で、父親と母親とともに命を落としました。戦闘中のモビルスーツの流れ弾に巻き込まれたのだ。

それがなければ、シンが軍人になることもなかったのだらう。シンはその出来事のあとで、

当時助けられたオーブ軍人トダカー左の勧めにより、シプラントグに移住し、義勇軍シザフトグに入隊した。

そして必死の訓練を耐え抜いてエリートグの証である赤服をまとい、当時シプラントグのトップであるギルバート・デュランダルの推薦によつて、最新鋭機シインパルスグのパイロットに選ばれたのだ。士官学校シアカデミーグ主席のレイを差し置いて。

シンは戦争を生き抜いて今に至る。彼が元の世界に帰つて戦争を止めようとするのは、家族の命を無慈悲に奪われた自分と同じ存在を、これ以上生み出さないためだ。

その戦う理由のみなもとの源である死んだ妹が、シングの眼の前に現れた。

そのショックがどれだけ強いか想像もつかない。あれ以来、なるべく早苗は霊夢の話題をシンの前で出さないようにしていた。システイニーグの作業の最中、一度シンと真剣に話そうとしたが、彼のほうから断られたというのもある。ナイーブになっているのだ。

もちろん早苗も霊夢のあの言葉には戸惑う他になかった。居合わせたとりたちみんなも同じだろう。当然、八雲紫やくもむかりとともに去りゆく彼女の姿を追おうとする者は誰もいなかった。シンが今まで使っていたシインパルスグごと消えた彼女たちは、今頃どこにいるのだろうか。

——シンは元々シコズミック・イラグの人間。霊夢さんはシ幻想郷グで生まれ育つたの人間のはず。どうということなの？

行動にも発言にも謎が多すぎる。さらには霊夢は「マユ」と名乗る直前に真路しんじを殺そうとし

ていた。その行為は早苗にとっても許せないものだ。

会って話をしなければ。

しかしその前に、今は自分たちの状況を整理しよう。

まずは真路しんじのことから終わらせる。永遠亭には、レイが番所から連れ出したドクター・ヴィクターも来ていると聞いた。彼がいれば真路しんじを生み出した理由と、なぜこの世界で暴挙に及んだのかを訊き出せる。そこにシンが、コズミック・イライラに帰ることのできる手がかりがあるかもしれない。

視線を落とすと目的地である永遠亭の屋根が見えてきた。早苗は心が晴れない気分悩まされたまま、玄関に向かって緩やかに高度を落としたり。

止まない想い

「迷いの竹林」の奥深くにある永遠亭は、幻想郷の住人たちに大きな信頼を寄せられている。この和屋敷は、幻想郷の中で唯一、外の世界で言う病院に当たる施設であり、従来の地上の人々たちが行なってきたものよりも、遥かに高度な医術が実現できる場所だった。

シグサリーによって銃火が里で飛び交った後、怪我人たちは永琳たちが許す限りここに運ばれた。あれから時間が経つてある程度は落ち着いたものの、里にはまだ満足な処置を施されていない患者たちがたくさんいる。永遠亭の戦いは今も続いていた。

「レイのときと同じね」

その昼下がり。

定期検査として永遠亭を訪れていたレイ・ザ・バレルはついでにきた比那名居天子と、シン・アスカとともに椅子に座りながら、そうつぶやく八意永琳を凝視していた。診断室の椅子から、ベッドで眠っている守矢真路の姿を目にする永琳のとなりには、弟子の妖怪兔の少女、鈴仙・優曇華院・イナバの姿もある。

さらには真路を創り出したシグサリーの黒人の科学者、ドクター・ヴィクターの姿もあった。彼は鈴仙に縄で手首を縛られていた。里を荒らした罪人の扱いを受けているからだ。ヴ

イクターは、シグサリーグの重要参考人として日々事情聴取を受けている身だ。今日は朝早くここに呼び出され、真路のクローンの体に関する情報を根掘り葉掘り質問されていたらしい。

「あのちびっ子……真路の体、治せるの？ 永琳、鈴仙」

天子が問う。永琳が手にしている試験管の中身は、真路から採取した血に彼女お手製の薬品を混ぜたものである。それは澄んだ赤色から濁った白色に変わっていた。

「もちろんよ天子。ヴィクターから体のからくりも聞き出せたし、この子の命はすぐに治せる。すでに薬の用意もできているわ」

「ほう。さすがは噂に聞く月人の天才、八意永琳。僕が提供したデータからわずか数日でそこまでこぎつけるとは。貴方のような方が僕らの世界にいれば、クローンの問題どころか、プラントのコーデイネイターの出生率低下も、あつという間に解決できそうですね」

「お褒めいただき光栄ね。貴方のように平気で命を弄ぶような人間に褒められてもちつとも嬉しくはないけれど」

「私は自らの探究心に従っただけですよ、ミス永琳。戦争を利用して、真に望まれるべき『英雄』を創り出しただけに過ぎません。事実、真路はこの『幻想郷』に来たことで、愛を知り、守るべき人のために戦える一人の戦士として完成した。それはつまり、一人の人間を生み出した私こそ神の所業を為せる者として——」

「それ以上しゃべるなら撃つ。お前の下劣さは不快極まりない」

レイが冷ややかに手にしていたザフト正式拳銃を向けて、ヴィクターの歪んだ狂気を一蹴する。レイもまたクローンであるため、真路を生み出したヴィクターの言葉が許せない。

「やめろレイ、お前が殺す必要もない。コイツは里と、真路への償いのために生きてもらわなきゃいけないんだ。……それよか、永琳さん。治せるつてのは具体的にどんな感じなんです？」

シンもまた刺々しく返した後で、改めて永琳に問いかける。

「調べてみたところ、守矢真路くんは確かにシンのクローンね。遺伝子上、貴方たちは同一人物。そしてレイから採った血と同じように、細胞分裂を抑える劇薬の成分が血に溶け込んでいた。この薬と、体を持っているはずの霊力が著しく少ないクローン特有の現象。これが短命の原因よ」

薬品を混ぜた血が白くなった原因は、真路の中に混ざっていた細胞分裂の抑制剤だ。それはコズミック・イラにおいて是非常に限定された用法でしか使えない劇薬であり、人体に極めて有毒な成分と重い副作用を持っている。

そして霊力とはいわばすべての命に宿っている生命エネルギーだ。人体を蝕む毒と、体に宿しているはずの霊力が少ないこの二つの原因で、真路もレイも寿命が短いと判断されていた。コズミック・イラ最先端の技術でも遺伝子の世界は完全には解明できていない。だから不完全なクローニング処理が実行されてしまったのだ。

「俺がアル・ダ・フラガのクローンであるように、彼もまた人の勝手で生み出された贗作だ。

だが」

「レイ……真路が贖物だとしても、あいつは——」

「ああ。他の誰でもない、一人の人間だ」

かつてメサイア、攻防戦で戦った宿敵からの言葉を使って、レイは言う。

「その命は君だ！ 彼じゃないッ!!」

レイは一人の男を思い出す。

キラ・ヤマト。自分たちクローンが生み出される元凶となった、唯一のスーパーコーディネイターであり、自らが盲信していたギルバート・デュランダルのとって最大の障害だったパイロット。

今はさとりが行使している、フリーダム^のオリジナルの使い手であり、その実力はシンと自分をも凌ぐ前々大戦からの英雄だ。

彼から言われたあの言葉は、デュランダルの言葉こそ正しいと信じて戦っていた自分の運命を解き放ってくれた。

「それが、君の運命なんだよ——レイ」

薄暗いラボの中、ギルバート・デュランダールから笑みとともに送られた青と白のカプセル錠

劑。

真路も成長加速器で十代前半にまで肉体年齢を引き上げられたあと、ドクター・ヴィクターから同様の薬を与えられていたのだ。

真路に訊いてみたところ、どうも彼は飲まされていた薬が毒であるかどうかも知らない様子だった。ヴィクターのことだから敢えて知らせてなかったのだろう。幼子の弱みに付け込んで、『本物』であるシン・アスカを殺害しようとするヴィクターの——いや、シグサリーの狡猾さは許しがたい。

「贖作、だとしても」

レイの言葉に対し、永琳はそう切り出して続く言葉を放つ。

「今の貴方も、真路くんも紛れもない人間よ。命に本物か贖物かなんて関係ないわ。人と妖怪が平気で共存している世界なんだから。生まれた理由も背景も、この『幻想郷』では関係ない。そうでしょう?」

「……ああ、そうだな」

たしかにその通りだ、とレイはうなずいた。

所詮それらはくだらない理由だ。事実、レイは記憶をなくしている間、青娥から自分の体の病の正体を知らされるまで気にしたこともなかったし、知った後もあまり気にしなかった。元の世界で起きた身の不幸をいつまでも引つ張っても仕方のないことなのだ。

それをレイはこの世界で知った。

「クロインの体の治療についてだけど、これはレイ、貴方の体がきつかけになってくれたわ。今の貴方はクロインの短命を克服できている」

「たしか、輝夜が説明してくれたことか」

レイは里の襲撃の直前に、輝夜から言い渡された自身の体について思い出す。

以前レイは神靈廟で天子の話し相手になった後、お礼として、神樹の桃なる天界の桃の一種を受け取って口にしていた。

あの時以来、レイの体で起きていた靈力の欠乏と細胞異常が無くなり、普通の人間に非常に近い体質に変化したと輝夜が説明してくれたのだ。それはすでにシンにも話している。シンがそれを知った時、彼は心の底から喜んでくれた。

もうクロインであることを気にすることは無い。これからは一緒に生きられるのだと。

レイもその言葉を聞いて、今まで胸の中に巣食っていた闇が晴れたような気がした。

「レイの体が真路の体を治せるモデルケースになったってことなのか？」

シンの疑問に対して、その時初めて鈴仙が口を開いた。

「それについては私からも説明します、シンさん」

彼女はヴィクターの身柄を永琳に預けた後、近くにあるホワイトボードを指さしながら説明を始めた。そこに描かれていたのは人体と遺伝子のモデル図らしきものだ。永琳が描いたのだ

ろう。

「レイさんの体を検査してわかったことなのですが、天界の桃を薬に加工することで、クローシンの短命を解決できる薬の精製ができることが分かりました」

初耳だ。思わずレイは「なんだって」と驚き、口開いてしまう。シンもまた同じリアクションを取っていた。

「じゃあ、真路しんじもレイと同じように！」

「そのとおりですシンさん。今朝なんとか真路しんじくん用の治験薬ちけんやくが完成しました。今後、これを定期的に飲んでもらって検査を受けてもらいます。効果に問題なければ、真路しんじくんも普通の人間として生きられるようになると思いますよ」

「そっか、よかった……」

その知らせを聞いてシンは胸をなでおろした後、急にとり代りの天子てんしが黒帽子が落ちるほどの勢いで、レイに勢いよく抱きついた。

「やったじゃない、レイ！ 全部全部、私のおかげね！ アンタを私の家来にしてよかったわッ！」

「うおっ、おい……！」

座っていたイスの上から転げ落ちるものの、天子てんしの華奢な体を優しく受け止める。突然の行動に思わず面食らった。

「なんだよレイ見せつけちゃって、ずいぶん仲良しじゃんか」

「別にそういうつもりは……っ」

「俺が知ってるレイは、ガールフレンド作るようには見えなかったんだけどな」

シンの面白そうな様子に顔が熱くなった後、レイはかぶりを振りつつ天子の体を離れた。

「なに、照れてるの？ せっかく女の子の体を抱きしめたんだからもっと喜びなさいよ」

「好きこのんだわけじゃない。時と場合をわきまえろ」

レイは落ちていた帽子を無造作に天子の頭に戻したあとで軽く深呼吸する。

「一応言っておくが別に大した関係じゃない。天子はただ、俺と青娥の事情に巻き込んでしまっただけだ」

「バカ、大した関係じゃなくない」

「気恥ずかしさからレイは強めにそう言ってしまうものの、天子が平然と否定した。

「アンタと私はもう主人と家来の関係でしょ。あの意地悪邪仙じゃせんや、冥界の亡霊姫にこき使われているアンタをこの慈悲深い比那名居天子ひなないてんし様が直々に引き取ってあげようというのよ？ アンタは非想天則から私を守ろうと戦ってくれたし、認めてあげる。お父様は反対するかもだけど、私がいっきりに言えば、天界に置いてくれることも許してくれそうだしっ」

「家来も何も、それはお前が勝手に言っていることで——」

「おやおや、僕らはのろけ話を聞かされているのですかね。甘酸っぱい青春を真正面から見

のは気恥ずかしいのですが」

言い争うレイたちを眺めつつ、ヴィクターが呆れ気味にそう零す。シンも永琳えいりんもそれに対し苦笑いでいるしかなかった。こればかりはヴィクターに同意見だ。

「それに……もうレイはテロリストっていう連中とも戦う必要がなくなったんでしょ？ だったらこれから先、どこにも行くアテナなんてないじゃない。白玉楼にいたのも、体の病気を治す目的があったからって妖夢から聞いているわ。普通、冥界に生きた人間がいちゃいけないんですよ」

レイはしばし無言になる。

天子てんしの言う通り、レイは命の消費を最小限に抑える目的のために冥界で過ごしてきた。その必要がなくなった今、白玉楼に留まる理由もない。記憶を取り戻すために青娥の手引きに従い、シンと戦う理由もなくなった。

「レイってば、変わったな」

「そう、か？」

「うん。前のお前なら女の子とそんな会話するようなタイプに見えなかったし」

そうなのか、俺は？ シンの言葉を受けた後で、初めて自分の頬が緩んでいたことに気付く。

レイは「幻想郷」に来てから、自分のことを心配してくれる存在を数多く得た。青娥、妖夢、そして天子てんし。

それまで心から信頼しあえる存在はシンかデュランダル、そして兄とも呼べるクルーゼぐら
いだった。

この感覚は、悪くない。

「と、とにかく薬ができているのなら真路しんじに早く飲ませるべきだ」

気持ちを切り替えてそう言うのと、永琳えいりんと鈴仙れいせんはおかしそうに口元に手を寄せて笑い始める。

「レイさんでもそんな顔するんですね。ね、師匠」

「そうね。いつもムスってしているときより可愛らしいわ。こういうところは年頃よね」

「からかうな。さつさと真路しんじを起こしてくれ」

「わかりましたっ。おーい、起きて真路しんじくん。おくすりの時間ですよ」

鈴仙れいせんがそれに従い、診察室のベッドで寝息を立てていた真路しんじの肩を軽く叩く。

「ふああ」

すぐに彼は眠たそうに目をこすりながら体を起こした。あくびをしながら目を覚ました真路しんじ
は、軽く伸びをしながら問いかけてくる。

「おはよ、みんな。あ、シンお兄ちゃん、レイお兄ちゃん。おくすり、やっとできたの？」

「ああ。これでもうヴィクターの薬を飲まずに済む」

レイが穏やかに答え、その後ろでヴィクターは心外そうに——しかし特に傷ついている様子
でもなく——肩をすくめる。

「ずいぶんな言われようですね。僕の薬がなければ今日まで生き延びることすら難しかったと言うのに」

「劇薬を子供に与える男が、偉そうな言葉を言うんじゃないわよ！」

天子てんしがそれを一蹴したあとで、用意を済ませた永琳えいりんが錠剤しんじを真路に手渡した。

「さ、できたわ。なるべく苦くないようにしておいたから、ゆっくり飲みなさい」

赤と白のカプセルに包まれたオーソドックスな見た目の薬を見て、レイは念の為永琳えいりんに訊いた。

「材料はなんだ」

「貴方あなたが口にした桃を粉末状にしたものと、蓬菜ほうさいの葉の精製に使ういくつかの材料を混ぜたものよ。詳細を話すと長くなるけど」

「リスクは？」

「私の薬にそのような落ち度があると思つて？ ……強いて言うなら決められた量以上は飲ん

じゃいけないことかしら」

「助かる。永琳えいりん。お前たちにはいつも助けられてばかりだな」

「里の人々を少しでも守ってくれた貴方あなた達への恩返しとでも思つて頂戴。彼らによつて被害が拡大すれば、幻想郷まぼろしの人妖ひとのバランスにも大きな影響を及ぼしかねなかつたし、私たちの住む、迷いの竹林まよひのたけにも火の手が届いてもおかしくなかつた。治療費は貴方あなたに免じてタダにして

おくわ。新しい薬を作るいい勉強にもなったしね」

永琳えいりんからのその言葉を聞いて安心する。

レイが育ての親であるギルバート・デユランダルから自身がアル・ダ・フラガの二体目のクローンで有ることを知った時、何よりも欲したことが『普通の生き方』であった。それを得ることができるとも思わなかった。天子てんし、永琳えいりん、鈴仙れいせんだけじゃない。ここまで助けてくれた妖夢や、体の病状を止めるために冥界に身をおくことを認めてくれた幽々子、それに、また出会うことができた親友のシン。

この世界の人々のおかげで、また俺はシンと、みんなと生きることができる。そして自分と同じクローンである真路しんじもまた普通の人間として生きることができる。

「よかったな、真路しんじ」

「うん、シンお兄ちゃん！ もう痛い思いしなくて済むの、うれしいよー」

彼は明るく元氣そうに言う。真路しんじも毎日お見舞いに来てくれるシンとすっかり打ち解けていた。こうして並ぶと本当の兄弟のようにも見える。「お兄ちゃん」と慕っているのだからなおさらだ。

その様子にどこか懐かしい感覚を覚えた後で、レイは自身のやるべきことを思い出す。

『幻想郷』におけるモビルスーツの異変が終わり、自分たちを縛る戦いの運命の輪は閉じた。

『もうわかっただろヴィクター。真路しんじはもう、俺と戦わせるためのモノじゃない。これからは

自分の意思で生きていくんだ。もうお前の思い通りにはならない」

「ええ。完敗ですよ、シン・アスカ。ですが満足しています。僕の生み出した『英雄』は、いまここに確かに一人の人間として完成した。むしろ晴れやかな気分ですよ」

そしてレイもヴィクターの前に立って言う。

「貴様にはこれからも罪を購^{あがな}つてもらおう。お前たちのせいで失った命はもう戻らない。だからこそお前は簡単に死なせる訳にはいかなかった。貴様は生涯をかけて、この世界のために尽くしてもらおう」

憎いからと、誰かを殺したからと。報復のために命を奪うことはあまりにも簡単だ。

だがそれでは何も解決しない。罪を犯したのなら、その罪を償うために生きて、働いて、傷つけられた人々の助けになるべきだ。ヴィクターは研究者であり、彼の頭脳の中には里の復興の助けにもなる確かな技術がある。

だからシンもレイもヴィクターを殺さない。彼の処遇は『幻想郷』の人妖^{ひよ}たちに任せることにした。

「当然ですよ。従いますとも」

シンとレイの糾弾に、ヴィクターは淡々と返す。まるで悪びれているようには見えなかったが、ここで彼を責めても無意味だ。

そしてレイは真路^{しんじ}と喜び合うシンの背中を見つめる。

レイの戦いはまだ終わっていない。

元の世界に尚も帰ろうとする親友を、戦いの運命から解き放つこと。そのためレイのやるべきことは決まっていた。

診察室を出た後、シンは暗くなった縁側で愛用の腕時計を見つめる。

もう夕方だ。近頃は肌寒くなり、日の入りも早くなっている。冬がもう間近なのだ。シンは真路やレイと診察室でしばらく話した後、一度落ち着ける場所に行こうとここに来た。

今の永遠亭はこうして日が沈まなければ常に慌ただしい。いつまでも永琳たちの邪魔になるわけにも行かない。ヴィクターについても里の人間に引き渡したから心配する必要もないだろう。

二週間前。シンは上空で真路の乗るモビルスーツ、デステイニーMBを辛うじて撃退した。性能で劣るデステイニーインパルスで。

その際シンは早苗と一緒に、真路をコックピットから助け出した後で永遠亭に運んだ。真路はシグサリーの輸送船の中で、ずっと育ての親であるドクター・ヴィクターから自身のオリジナルを殺すことを言い聞かされて育ってきた。

事実、生まれたときからシンを殺すために訓練を積み重ねてきた真路の実力を前にして、死を覚悟せざるを得なかった。特務隊FAITHの先任にあたるハイネ・ヴェステンフルス

専用機である、デステイニーの強化改修機、デステイニー MAXIMUM BLAZE Bの性能を百パーセント引き出してくる彼の戦いは苛烈だった。

少なくともシンは元・戦艦 ミネルバのトップガンとして、前議長のデュランダルに FAITHとして任命されたの己の強さを誇りに思っていた。前大戦『ユニウス戦役』を生き抜いてきた経験は伊達じゃない。

例えデュランダルが自分のことをキラ・ヤマトとラクス・クラインを倒すための駒として利用する目的だったとしても、国を代表するエースとして、デステイニーの試作一号機を受領した身として、戦争を無くすための力になれる力を持っている自覚がある。

だというのに真路は——機体の性能差と整備コンディションで劣っていた状況を踏まえても——終始こちらを圧倒していた。もし少しでも油断していたら、自分は無邪気な殺意に討たれていた。

今こうして無事に生きていること、彼を殺さずにモビルスーツから下るす事ができたのは奇跡としか言いようがない。

——また、あの感覚に助けられたな。

戦いで度々経験する……視界が澄み渡り、相手の動きが手に取るようにわかるあの感覚を思い出す。

デステイニーの原子炉を復活させるためにさとりと戦った 地霊殿。

三機の強化GAT-Xシリーズと戦った。無縁塚。

河童の作り上げた。非想天則」と一戦を交えることとなった霧の湖。

それぞれの戦いにおいて感情が爆発した瞬間に突入する、相手の動きの先の先が読める未知の領域。体の奥底で何かが弾けて、底知れない力が体中を満たす感覚。

あの状態に陥る時、シンは以前より早苗から『シンから霊力を感じる』と言われたことがあった。『聖輦船異変』から逼迫した状況がひっきりなしに続いたこともあって、シンはそれまで彼女の言葉を余り深く考えてこなかったが、今日は違った。直感が訴えかけてくる。难道か無視をしてはいけないような気分だ。

——確か、最初に感じたのは連合のモビルアーマーに墜とされそうになった時だ。

前大戦時に戦艦、ミネルバのクルーだった頃。ブレイク・ザ・ワールドと呼ばれる、地球に、ユニウスセブンの破片が落下する大事件から、間もなくして起きたオーブ領海線付近での戦い。

当時、オーブ、オノゴロ島に停泊していた、ミネルバは、大西洋連邦と同盟を結んだ。オーブから離れるべく出港した。

その時沖で待ち伏せしていた地球連合艦隊と会敵し、戦闘になったのだ。敵は飛行ユニットを装備した多数の量産型モビルスーツ、ウイングダムを主軸とし、さらに大型MA、ザムザ、ザムザを、ミネルバにむけて放ってきた。

「ザムザザー」は「ミネルバ」の陽電子破砕砲「タンホイザー」を無効化する陽電子リフレクターを装備しており、当時「ミネルバ」の艦載機において、空を飛べる「ザムザザー」や「ウインダム」たちに正面から対応できるのはシンの「フォースインパルス」のみだった。仲間にも頼れず、単身独り戦う中。シンは敵の圧倒的なパワーに押し切られて墜とされそうになった。その時だ。頭の奥で何かが弾けた。死んでたまるか！ 生きてやる！ ——それら生への渴望がシンの中に眠る潜在能力を開花させた。

あの力に目覚めた後、全ての動きが無我夢中だった。視界が全方向に広がり、相手の動きは時でも止まったかのようにスローモーに見え、自分の操る「インパルス」が思った通りに動いてくれる。気付けばシンは「ザムザザー」を墜としていた。

その力の名は——

「SEED」

ヴィクターはそのシンが持つ因子のことをそう呼んでいた。新人類への兆しを持つ、選ばれし人類のみが有する進化の種。優れた種への進化の要素であることを運命付けられた因子。

それが「SEED」だ。

「SEED」が目覚めてからシンは数え切れないほどの戦果を上げてきた。前大戦時、モビルスーツ、モビルアーマーは合わせて百を優に超える数を撃墜し、自分たちの前に立ちはだかつてきた海上艦、航空艦も全て沈めてきた。